

ZÉNSHO

株式会社 ゼンショーホールディングス
ZENSHO HOLDINGS CO., LTD.
〒108-0075 東京都港区港南2-18-1 JR 品川イーストビル
URL <https://www.zensho.co.jp>



ゼンショーフェアトレード

—— つくる人と飲む人の心をつなぐ ——



ZÉNSHO



生産者とともに育む 直接提携型フェアトレード

「世界から飢餓と貧困を撲滅する」という企業理念のもと、
2007年から歩みを始めたゼンショーフェアトレードとは？

直接提携型だからできる 生産者との密接な関わりあい

ゼンショーフェアトレードは、事業者が生産者と直接取引をする「直接提携型」を採用している。生産地の選定から農業指導、調達、加工、販売に至るまで、すべての工程にゼンショーが責任を持って関わる形だ。

そもそもフェアトレードとは、途上国で生産される農作物や製品を、その価値や労働の対価に見合った公正な価格で継続的に取引を行うことで、生産者の生活向上と経済的自立を目指す活動である。ゼンショーが「認証型^{※1}」ではなく「直接提携型」のフェアトレードを選んだのは、生産者と対話を重ね、より積極的な関わりを持つことが望ましいと考えたからだ。

社会開発資金が 生産者の自立を促していく

フェアトレードを真の意味で生産者の生活改善や経済的自立に役立てるために。ゼンショーの買取価格は商品代金に加えて、社会開発資金^{※2}を含んだ価格となっている。これにより生産者たちは、日々の生活を商品代金でまかない、地域の課題には社会開発資金を分けて使えるようになった。社会開発資金を何に使うかを決めるのは生産者たちだ。もちろん話し合いにはゼンショーのフェアトレード担当者も参加する。こうして決定した社会開発資金の使途は、ゼンショーが取引している生産者団体の枠を飛び出すことも少なくない。例えば、水道設備の建設や学校の建設など、広く地域の発展に貢献するものも多い。これら

の活動を続けることにより、生産者にとってコーヒー産業や茶産業が誇りある地場産業だと思ってもらえること。それが次世代の継承へとつながる一助となる。こうして培ってきた信頼関係こそがゼンショーフェアトレードの大切な財産なのである。

※1 認証団体が生産者、輸入者、販売者それぞれに一定の基準で認証を与えるフェアトレードの形。

※2 原料買取価格の中で現地の人々が必要とするさまざまな社会開発活動に充てられる金額のこと。



ゼンショーのフェアトレード

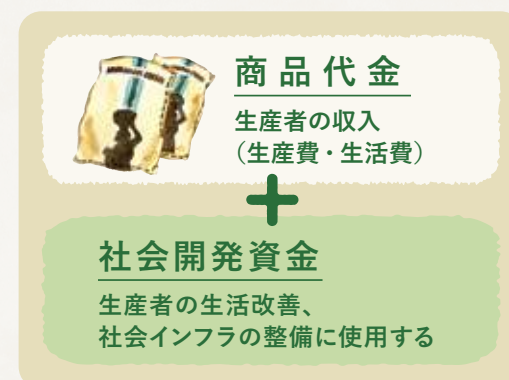


原料の生産

ゼンショー社員が定期的に現地を訪問し、市場の情報収集、品質や安全性の確認、現地生産者に対する技術指導を行う。

ゼンショーの買取価格

ゼンショーのフェアトレード原料の買取価格には、生産者の生活改善につながるコストが含まれている。



社会開発資金は組合により、一部の生産者や特定の個人に渡らないよう管理されている。使途は生産者全員で話し合い、合意の上、決められる。



主な活動内容
「女性支援」「教育支援」「生活改善」
「農業技術支援」「環境保全」などを通して
生産者の経済的自立を促進する。



商品化して販売

取引量を安定的に確保することで安全でおいしい商品のお求めやすい価格での提供を実現している。

人と人との出会いから フェアトレードは始まる

ゼンショーフェアトレードのこれまでの歩みを振り返ると、その核にあるのは人と人との出会いだと確信する。

顔の見える関係の構築

直接提携型であるゼンショーフェアトレードは、すべての決定に人と人の関わりがある。

生産者たちは、紛争や災害などさまざまな理由から、暮らしがままならなくなっていることが少なくない。だからこそ現地を訪れ、国や地域が抱える問題、生産者の生活を知ることから始めていく。お互いに顔を突き合わせて話をしていく中で、フェアトレードという手段が解決の一助になるようだと判断できたら、そこ

でやっと取引のスタートを切るわけだ。

取引を開始してからも、顔の見える関係は続いていく。生育環境や、収穫方法、選別、保管など、あらゆる工程を現地に入って確認。より良い品質にするためのアドバイスを欠かさず行っていく。何より大事にしているのは、継続的な関係を築くことだ。例えば流行りのコーヒー産地だからといった一過性の取引は、たとえ適正価格での取引だとしても、生産者に安定した生活をもたらすことはできない。だからゼンショーでは、継続した取引を前提とし

たフェアトレードに取り組んでいる。なぜなら買い取りが保証されていることは、生産者に心の余裕をもたらすと同時に、今後の暮らしを計画する助けにもなるからだ。

生産者と手を取り合い 持続可能な社会の実現へ

こうして主体的にフェアトレードの取り組みを継続してきた結果、生産者たちの暮らしは少しずつ改善に向かっている。だが、それがゴールかという点、そうではない。なぜなら、気候変動という新たな問題が起きているからだ。コーヒー豆の収穫は年に1回だ。気候変動による収量の減少は、生産者たちの生活に大きなダメージを与えている。そして、気候変動により発生する災害や危機は、生産地に限らず世界共通の課題でもある。気候変動という地球規模の問題と向き合いながら、持続可能な農業や地域の発展のためにできることは何か。生産者も消費者も、そして我々も全員が納得



できる形で循環をつくることが求められている。従来の「先進国と途上国」という枠組みのフェアトレードからは脱して、お互いがより対等に課題に向き合っていかなければならない。だからこそ、ゼンショーは生産者と手を取り合える距離感で、これからもフェアトレードに取り組んでいきたいと思う。万人が真に平等で、持続可能な調和的発展を続けることのできる社会を実現するために。

ゼンショーフェアトレードの歩み

2007 東ティモールのフェアトレードコーヒーをすき家で販売開始。

2009~ 生産者に寄り添う社会開発活動が各地で始動。



2009年、東ティモールで農業指導を開始。有機 JAS 認証取得。



2010年、タンザニアで母子健康プログラムを実施。衛生指導員の育成により、乳幼児死亡率が減少。



2011年、ケニアの紅茶工場に異物除去設備を設置し、品質を改善。



2012年、メキシコの水不足に悩む農家に向けて、家庭用貯水タンクを78基設置。



2014年、エクアドルの山間地域に、幼稚園・小学校の教育施設13棟15教室を建設・改修。

2015



震災の支援をきっかけにネパールと紅茶のフェアトレードを開始。取引国は18カ国へ。

2021



新型コロナウイルス感染拡大に伴い、現地訪問の中断を余儀なくされる。現地では緊急支援を実施。

2022~



現地訪問を再開。取引国は20カ国へ。



一人ひとりと向き合い 培ってきた深い信頼関係

現地の復興を支える コーヒーのフェアトレード

東ティモールは、ポルトガルによる長年の植民地支配の後、インドネシア軍の占領からの独立闘争を経て、2002年、念願の独立を果たした。しかし、長年続いた混乱の影響は

根深く、ほとんどの建物やインフラなどが破壊されている状況だったという。そこに日本のNGOであるピースウィンズ・ジャパンやパルシックらが現地に入って支援活動を実施。職を失った帰還兵たちが農業従事者として働けるよう、コーヒー産業づくりの取り組みを行っていた。独立から5年が経った頃、ある



1 急峻な山々の中に点在する集落は、豊かな自然に囲まれている。2 整備した水道には、ボトルなどを持って水を汲みに行く。3 まだ水道設備が行き届いていない集落での建設も決定しており、さらなる整備を進めている。

NGO がそこで収穫したコーヒー豆の輸出先に困っているという話をゼンショーのフェアトレード担当者が耳にした。

「いまだ復興の途中にある東ティモールを支援することができるのなら、ぜひ関わりたいと思いました。早速、会長の小川に起案したところすぐに許可を得られました」

2007年、『すき家』でコーヒーの提供をスタート。グループで最も店舗数の多いブランドで販売することで、フェアトレード商品のコストの高さを吸収させる仕組みをつくり上げた。これがゼンショーフェアトレードの起点となったのである。

生産者と会話を重ねる中で 課題を見出していく

フェアトレードの開始にあたって、担当者がまず最初に行ったのは、現地の様子を知ることだった。急峻な山々に点在するコーヒー生産地をめぐり、生産者たちとの会話を重ねていった。

「コーヒー豆の収穫は年に1回。帰還兵である彼らはコーヒーについて学ぶ機会が少なく、手探り状態でした。だから、大事にしたのは計画的な農業をやろうということです。庭先でその日の食料を育てながらも、今は収入を向上させるためにコーヒー畑の再生が大事だよね、と。換金作物であるコーヒーの価値を上げていくためにできることを伝えていこうにしました」

そのひとつが古木対策についての農業指導だ。コーヒーの木は育ちすぎると、葉や幹に栄養をとられるため、豆の収量が減るのだが、現地では「せっかく育った木を切るのはもったいない」とそのままになっていた。結果、畑の大半が古木となり、生産性が低い状態だった。そのため、現地に入って剪定などの実演をし、効果を教えながらノウハウを普及させていった。こうした農業技術支援や有機農業推進の結果、2009年には有機 JAS 認証を取得。生産者たちはこれまで以上の収入を得ることができた。

より良い暮らしと コーヒー豆の品質向上のために

フェアトレードコーヒーの販売を通して得た社会開発資金をどう使えば暮らしがより良くなるのか。ゼンショーは生産者たちと話し合い、使途を決めてきた。NGO とともにやってきた活動は、水道施設の建設をはじめ、緊急時の患者運搬用のオートバイの導入、女性の生活向上のためのハーブ栽培や家計簿の指導など多岐に渡る。水道施設に関しては、現在まで14集落での設置が完了し、534世帯の家の近くで衛生的な水を汲めるようになっている。

「この水道設備はコーヒー豆の品質向上にも役立っています。摘んだ果肉を水路に流すと、未熟な豆が浮いて排除できますし、加えて、果肉も除去できます。その際に発酵の原因となるぬめりを取ることができます。ぬめりを取ってから乾燥・脱殻を行ったコーヒー豆は手をかけた分、仕上がりが違うのです」

他にも、集荷用のトラックの導入、コーヒー豆を保管する倉庫の建設など、インフラ整備を行い、コーヒー豆の品質向上へとつなげていった。そうしてつくった豆を自分たちが売りたい価格で売れるように、消費者の側に立った指導も行われている。それがカップリングセミナーだ。

生産者が自信を持って コーヒー豆をつくるために

セミナーでは生産者たちがさまざまなサンプルコーヒーでカップリングを実践。どのような状態の生豆が、東ティモールらしくておいしいコーヒーなのかを学んでいった。コーヒーの味や香りといった品質を自分たち自身で正しく判断できるようになれば、消費国のバイヤーたちの都合の良い発言に惑わされることも少なくなる。生産者が自信を持ってコーヒーをつくる一助となるわけだ。

こうしたゼンショーの活動は、2016年のタウル・マタン・ルアク大統領ご夫妻（当時）の



1 集荷時期には集荷トラックで集められた生豆で倉庫前が賑わう。2 コーヒー鑑定士の資格を持つゼンショーフェアトレード担当者によるカップリングセミナー。活動はさまざまな分野で行われている。

表敬訪問にもつながった。ゼンショー本社を訪れた大統領は、「私たちに消費者の立場と品質向上の大切さを教えてくれたことが今、国の大きな財産となっています」と感謝の言葉を述べたという。

買付競争の激化と気候変動 生産地が抱える課題に向き合う

ゼンショーフェアトレードの開始から17年。近年の東ティモールは、オイルマネーの影響もあり、インフラ整備が積極的に行われ、コーヒーの生産地である山間部においても道路や電気が整備され始めている。それに加えて水道設備の建設も続いており、生産者たちの生活が徐々に整い始めている。

「ある集落を訪れた際に『電気、水道、道路が通って、やっと自立した生活ができるようになった』と喜びをかみしめていて。取り組んで良かったと思いましたね」

ゼンショーがフェアトレードを始めた当時は

無名に近かった東ティモール産コーヒーも、近年では世界中から注目を集めるコーヒーとなった。

「今ではアクセスしやすくなった産地に世界中からバイヤーが集まります。ただ問題なのは、コーヒー豆の買付競争が激化する一方、近年の世界的な気候変動の影響によって収穫量が下がっていること。そのため、需要に対しコーヒー豆の生産量が追いつかない状況になりつつあります」

ただ、私たちには生産者たちと培ってきた17年の信頼関係がある、と担当者は言う。

「現地の一人ひとりと向かい合って、コーヒーづくりの喜びを分かち合いながら、時には手を取り合って課題を解決していく。そのような時間の積み重ねがあるからこそ、私たちは貴重なコーヒー豆を分けてもらえるのです。そのような想いを大切にして、これからも現地の未来に寄り添って、ともに歩み続けていければと思っています」



1 2 集荷用のトラックが導入されたことで、大量のコーヒー豆を一度に運搬できるようになった。

3 移動手段の少ない集落に導入されたオートバイは日常の生活でも役立っている。



ひとつのルワンダ 互いを思いやり見つめる先

フェアトレードを通じて 国の復興を支える

なだらかな丘陵が幾重にも連なるルワンダ。その名前を聞いて、20世紀の悲劇のひとつに数えられる「ルワンダ大虐殺」を思い出す人も少なくないだろう。1990年から1994年にか

て、ツチ族とフツ族という2つの民族の対立構造によって引き起こされた内戦は、1993年には和平協定が結ばれたものの、翌年4月にフツ族の大統領が暗殺されたことをきっかけに関係が悪化。暴徒と化したフツ族によってツチ族の虐殺が始まり、その矛先はフツ族の穏健派にまでおよんだ。そしてルワンダ全国民

の10～20%もの犠牲者を出すことになったのだ。

ルワンダでフェアトレードを行うならば、ジェノサイドがあったという事実を目を背けず、ありのままを認め合うことが必要だ。その上で、コーヒーを通じてジェノサイドにより傷を負った国の復興に関わり、民族を超えた「ひとつのルワンダ」を目指す現地の人々を後押ししたいという思いがゼンショーにはあった。ところが、当初パートナーとして接触していた人物は、あくまでビジネスとしての関係を望んでいた。そんなとき、目に止まったのがテレビのドキュメンタリー番組に出演していたコーヒー輸出会社代表、ピエール・ムニユラ氏だ。彼は民族の異なる生産者たちと一緒にコーヒー生産者組合を立ち上げていた。

「映像を観ていると、コーヒーの増産が進む一方で、販路が十分に確立されていない印象を受けました」「ムニユラさんと生産者たちには民族の違いがあることを考えると、第三者である我々が関わる意義を感じました」

そこでゼンショーはムニユラ氏と一緒にこの

産地に入っていく。そして、すぐさまコーヒー豆全量の買い取りを決めたという。生産者たちも「輸出できる相手を連れてきたぞ」とムニユラ氏への信頼を深めていった。こうして「ひとつのルワンダ」の実現に向けたフェアトレードがスタートした。今ではスペシャルティコーヒーの世界で名高いルワンダだが、当時はそのような評判もない中、ゼンショーは生産者の立場、復興作物としてのコーヒーの価値を高める取り組みを続けてきた。そうしてひとつひとつの活動を積み重ねてきたのがゼンショーのルワンダコーヒーなのだ。

水汲みという重労働から解放した 水道施設の建設

社会開発資金を活用した活動も、ひとつずつ地域の課題に寄り添って実施されている。まずは水道施設建設のために使われることになった。それまで清潔な飲み水を手に入れるには、山の上まで片道1時間以上かけて湧き水を汲みに行く必要があった。その重労働を担うのは、女性や子どもたち。そのため、



水道施設の竣工後、担当者が現地を訪れると、水汲みから解放され学校へ通えることになった喜びを子どもたちが歌にして届けてくれた。

子どもたちが学校に遅刻したり、欠席したりする問題が発生していたのだ。そこで、標高1,800メートルの湧水地からパイプを引き、村内5カ所に設置した中間タンクに流し、さらにそこから集落や学校近くの給水所に水を送る施設を建設した。その結果、村人を重労働から解放できただけでなく、その水がコーヒー豆の洗浄にも利用され、品質向上に一役買っている。

暮らしに役立つ 家庭科教室の実現

多くの子どもたちが学校に通えるようになったことで、今度は村の学舎が足りなくなるといふ問題に直面。すぐさま小中学校の校舎や男女別のトイレの建設を行い、家庭科教室の実現にも力を入れた。

「日本人の考える教育とルワンダ人の考える教育では全然違う。子どもを学校に送り出すのが当たり前ではないルワンダの生活の中で、本当に役に立つ教育課題は何だろうと思ったとき、『日本の家庭科教育がいいのではないか』と考えました。現地の子どもたちは、針も糸も持ったことがありません。しかし、教材として最低限の裁縫道具を配れば、学校で習ってきたことを家で発揮できますし、親御さんも喜ぶだろう、と。それに教材として新しい布を買わなくても、家には着古した服がある。それを雑巾にする前に使えるところだけ細かく切り、それを持ち寄って縫ってつなげば大きな布になります。端切れから袋やカーテンなどの実際に役に立つものを自分たちの手でつくれる。それはひとつの大きな自信になるのではないかと思います」



1 2017年に完成した家庭科教室では裁縫の他、かまどなどが整備され料理も学べる。2 裁縫セットを受け取り喜ぶ子どもたち。3 4 5 当初はゼンショー社員がデモンストレーションを行い、縫い方を教えていった。熱心に練習した結果、端切れをつないで敷物やエプロン、バッグなどもつくれるようになった。



1 コロナ禍で子どもたちが手づくりした布マスク。2 小学生たちに配られたゼンショーの裁縫セット。3 2022年の訪問時には家庭科教室の成果発表が行われた。4 中には自分で作成した服を着た卒業生の姿も。

現地に行って一緒に模擬授業を実施することで、興味を持ってもらってスタートした家庭科教育。コロナ禍のときは布マスクをつくることで、地域のマスク不足解消にもつながった。当初、この取り組みはゼンショーが重点的に支援しているコーヒー生産者の子どもたちが通う小学校1校での実施だったが、報告を受けた地方政府が生産地周辺にある他校での実施も要望。結果、合計7校の小学校で取り組みを実施することになった。

学びが新たな興味につながる喜び

「うれしかったのは、家庭科教室で裁縫を習った女の子がそこから服やデザインに興味

を持ち始めて、『今着ている服も自分でつくった服なんだ』と教えてくれたこと。新たな興味や夢につながった姿を見て、『直接提携型の私たちのフェアトレードに間違いはなかったんだ』と改めて実感することができました」

ジェノサイドから30年経った今、ルワンダはかつての荒廃から見違えるほどの成長を遂げている。とはいえ、周辺にはテロ組織の脅威が存在するなど、問題は山積している。

「今後、東アフリカ諸国の中でルワンダはどのような道を進むのか。『ひとつのルワンダ』の未来を後押しするためにも、生産者や市井の人たちの話を聞きながら、目指すべきフェアトレードの方向性を考えていきたいと思います」



母子が安心して暮らせる 環境づくりのために

フェアトレードを通じて 子育てしやすい環境を整備

2011年、ゼンショーはコーヒーの調達におけるネットワークの拡大を進める中で、ウガンダでのフェアトレードの可能性を検討することになった。そのきっかけは、ウガンダの支援活動を行っていた方から、「生産者組合とコーヒー豆の取引をしてほしい」と声をかけられたことだったという。

「コーヒー豆は産地のブランド化が進んでいて、有名な地域のは高値で取引されています。一方、当時無名だったウガンダのコー

ヒー豆は、高い品質にもかかわらず安い値段でしか買ってもらえないという現状がありました。ゼンショーではさまざまな店舗で幅広くコーヒーを展開できますし、市場にも大きなインパクトを与えることができます。そこで、コーヒー業界がつくり出した地域格差に対するアンチテーゼを唱える意味でも、ウガンダ産のコーヒー豆を取り扱おうということになったのです」

早速フェアトレード担当者がウガンダに向かい現地の調査を始めたところ、過酷な現実を目にすることになった。

「医療体制、特に出産施設が劣悪だったのです。設備も薬もない、ただ分娩台が1台置

かれている施設の中で、子どもが産まれる寸前の妊婦たちが床で寝ながら自分の順番が来るのを待っている状況でした。母子の負担が大きい環境を改善するためにも、安心して出産に臨める施設を建てようと考えました」

翌年、待合室を備えた新出産病棟を建設すると、続けて病室や設備も拡充。新しい医療施設は現地の多くの人々に利用されている。コロナ禍においては念願のコールドチェーンの設備や運用も整い、予防接種なども実施できる状況になっているという。

コーヒー産業を支える 次世代に向けた環境づくり

現在、社会開発活動として力を入れているのが就学環境の整備だ。現地の学校の生徒は、多くが山中に点在する集落の出身。当然、遠い道のりを通学しなければならず、夜明けに家を出て、日没後に帰る生徒が少なくないのだという。

「しかもコーヒーの生産地は、武装テロ組織が近隣に潜む国境付近。暗い山道の登下校は誘拐などの危険性があるため、多くの女生徒とその家族が学校に泊まることを希望していました。そこで、生産者組合とゼンショーは、寄宿舎を学校の教室棟横に建設することに合意。完成した宿泊施設では80人が手足を伸ばして休めるようになっています。また、教師が交代で宿直することで、より安心して学校生活が送れるようになりました」

現地では依然として課題が累積しているが、今後も生産者組合と話し合いながらその状況をひとつひとつ乗り越え、コーヒー産業をしっかりと根付かせていきたい、と担当者は言う。

「農業従事者が8割を占めるこの国で、農産物の生産が成り立たなくなったらそれこそ致命的な危機に陥ってしまう。そのような事態を回避するためにも、私たちは継続してビジネスができる環境を整え、現地の人たちの生活環境を支えていければと思っています」



1



2

1 2022年1月に完成した宿泊施設には2段ベッドが40台設置され、80人が休める。

2 窓は就寝時には重い扉で締められ、外部からの侵入を許さないつくりになっている。



家族や地域の生活を支える 女性の生産者グループ

生産者の日常を支える フェアトレードの開始

ペルー最北部の山間にある生産者組合とフェアトレードが始まったのは、2012年のこと。地域に暮らす生産者の多くは電気もガスもない生活を送っていた。しかも、貴重な現金収入であるコーヒー豆は仲買人たちに安く買い叩かれる状況だったという。ゼンショーがすぐに取引を行うことを決めたのも、この深刻さゆえからだ。

当時、コーヒー生産者たちにとって大きな悩みとなっていたのは、子どもの教育と後継者不足の問題だ。というのも、若者が教育を受けるために都会へ出ると、そのまま地元

に戻ってこなくなるケースが多いのだ。

「そこで、生産者たちと話し合い、社会開発資金を使って組合事務所の中に図書室をつくりました。図書室があれば、地域から離れずともさまざまな知識を手に入れられると考えたのです。また、そこでは農業にまつわる特別授業も実施するなど、若い世代が自分たちの家業である農業に興味を持ってもらうための取り組みも行っています」

このような施策を続ける中、女性の生産者たちから「女性の地位向上にも、社会開発資金を活用したい」という声が上がってきた。ペルーではいまだに男尊女卑の風潮があり、女性の社会参加の機会も限られている。ゼンショーは女性たちから意見を聞き、組合の女



組合事務所に併設する施設に集まり、それぞれの学校で学んだことを発表する生徒たち。現地の学校では、将来農業に従事したいと考える子どもたちが増えるよう、農業に関する授業が実施されている。

性グループからコーヒー豆の一部を優先的に購入するという取り組みを行うことを決めた。

豊かな生活につなげる 生産者発案のプロジェクト

さらに女性の生産者たちからの発案により、煙による健康被害を防ぐための改良かまどを家庭に設置した他、クイ（テンジクネズミ）の飼育プロジェクトを実施。クイは先住民族の血を引く生産者たちの家庭料理に使われるなど、現地では貴重なタンパク源として重宝されている。庭先で繁殖させて販売すれば食が豊かになるだけでなく副収入にもつながるのだ。

「現在は家庭菜園にも力を入れています。近年は、気候変動の影響で干ばつが起きることも少なくありません。そうすると、コーヒー豆を収穫できず、収入源が絶たれてしまう。そのような事態が起きても飢えることがないように、葉物を

中心とした野菜づくりを始めることにしました。この取り組みを行ったことで、コロナ禍のロックダウンで物流が滞ったときでも、食料はしっかりと確保することができたと思っています」

一方ゼンショーは、庭先でつくった食材の余剰分を販売することができるよう、組合事務所に併設する形で直売所を設置。朝採れ野菜のニーズは地域でも高く、常に賑わっている状態が続いているという。「かつて『汚くて稼げない』と現地で考えられていたコーヒー産業ですが、現在は誇りある仕事に変わりつつあります。実際、生産者たちを見ていると、『持続可能なコーヒー産業に地域で取り組もう』という一体感を感じます。気候変動のような課題もありますが、地域のコーヒー産業を次の世代、その次の世代につなげていけるように、生産者たちと一緒にその後押しをしたいと思っています」



1 家庭菜園で育てた野菜を収穫する女性。2 2021年、組合事務所に併設された直売所。

3 直売所で販売されるレタスとコリアンダー。



志高く思い描いた夢が 未来の故郷をつくり上げていく

震災支援をきっかけに始まった 紅茶のフェアトレード

2015年4月25日、ネパールの首都カトマンズ北西部を震源とするマグニチュード7.8の地震が発生した。ゼンショーは震災直後から日本のNGOと連携し、現地に物資を送るなどの緊急復興支援の活動を実施していた。

「取り組みを行う中、『再建に向けて、フェ

アトレードで支援ができるのではないかと考えました。ネパールは紅茶の産地として有名なインドのダージリンと隣接し、気候が似ています。そこで茶葉の栽培先を探していたとき、KTE^{※1}という紅茶農園を知ったのです」

KTEを経営するのは、ディーパック・プラカシュ・バスコダ氏という人物。彼は「地域の農民たちが安心して働ける場をつくりたい」という思いから独学で紅茶の有機栽培を習得し、

農園を開拓したという経歴を持つ。そもそもネパールという国は長年、深刻な貧困や失業問題を抱えている。そのため、働き手の多くが国外に流出し、中には傭兵となって他国の紛争に出向く者も少なくない。特に山間部では、その傾向が顕著だという。ディーパック氏はこのような現状を改善するため、紅茶を利用した地場産業の活性化に力を注いでいた。ゼンショーは早速KTEとのフェアトレード開始を決定。有機栽培された紅茶は『ココス』などのドリンクバーで提供され、好評を博している。

子どもたちの学びを後押しする カバンや文具などを給付

ただ、まだ課題は山積している。そのひとつが教育だ。ネパールでは義務教育制度が導入され、学費は無料であるものの、教科書や文具などを用意できず、通学・進級をあきらめる子どもたちがいるという。このような問題を解決するため、2015年に社会開発資金を原資とした「ゼンショー・スカラーシップ・プロジェクト」をスタート。返済義務のない奨学金が、毎年100名前後の子どもたちのもと

へ届けられている。

また、学校へ通う子どもたちに向けて、カバンや文具などを給付する取り組みも行うことになった。

「教育支援を受けた子どもたちの中には、その後都市部の大学に進学し、先生や医者となって現地に戻ってきてくれた人もいます。このようにゼンショーの取り組みが一人ひとりの夢を引き寄せることにつながっていることは、本当にうれしいです」

また近年は、KTEと茶産業の未来に関する協議も行っている。その中でゼンショーは、気候変動に対応する品種の育成や持続可能な茶栽培の実施、茶産業の後継者対策に向けた施策として「茶寺子屋プロジェクト」を提案。このプロジェクトを通じて、今後子どもたちに向けて茶の生産に特化した学びの機会を提供していくことになる。

「この提案はKTEにも快く受け入れられ、現在具体的な実施方法について意見を交わしている最中です。今後もゼンショーはKTEとともに力を合わせながら、子どもたちや地域の未来のための取り組みを続けていきます」



1 2023年5月、紅茶生産者の子どもたちが通う学校で開催された文具の贈呈式に参加。対象者65名一人ひとりに通学用リュックや文房具などを手渡した。2 山中の通学路を歩き、帰路につく子どもたち。



世界各地に フェアトレードを 広げていきます

☕ コーヒー豆の取引国

🍃 紅茶の取引国

🌿 ルイボスティーの取引国

※2024年6月時点



1 タンザニア
取引開始 2009 年



家族計画の指導や出産・育児に関する衛生教育、定期健診受診の啓蒙活動などを行う「母子健康プログラム」を実施。

2 ルワンダ
取引開始 2011 年



水道施設、小学校、家庭科教室の建設や、家庭科授業に使う裁縫キットの提供、学級文庫の設置などを実施。

3 コンゴ民主共和国
取引開始 2013 年



コロナ禍に食料などの緊急支援物資を配布。コレラ流行時には患者用医療施設の設置や医薬品の配布を実施。

4 ブルンジ
取引開始 2013 年



内戦で夫を失った女性生産者にヤギを供給。ソーラー発電キットとラジオを電気の通っていない家庭に供給。

5 マラウイ
取引開始 2013 年



女性生産者の自立した生活を支援するため、搾乳用のヤギやニワトリ、家庭用品を供給。

11 東ティモール
取引開始 2007 年



収穫量の落ちた古いコーヒーの木植え替えや、水道設備、コーヒー保管倉庫の建設などを実施。

12 ネパール
取引開始 2015 年



紅茶農園労働者の子どもたちに向け、返済義務のない奨学金制度を実施。奨学生に対しては学用品を配布。

13 メキシコ
取引開始 2009 年



貯水タンクの設置や、次世代のコーヒー生産を支える農業研修センターを建設。医療にアクセスしづらい家庭に薬箱を配布。

14 ニカラグア
取引開始 2015 年



生産量を激減させていたコーヒーの木さび病対策として苗木の提供を支援。ハリケーン被害に対する復興支援を実施。

15 コスタリカ
取引開始 2012 年



地震の被害を受けた診療所の修復や中学・高校校舎の再建を支援。コーヒーの木さび病対策として苗木の提供を支援。

6 ウガンダ
取引開始 2011 年



出産病棟や診療所における待合室の建設、水道設備の設置などを実施。また、小学校の女生徒用寄宿舎や中学校を建設。

7 ケニア
取引開始 2009 年



子どもを持つ労働者向けの託児所の改装や、公共図書館の建設、小学校における図書室設置などを実施。

8 南アフリカ
取引開始 2022 年



工場・季節労働者の子どもの教育や、心のケアのための音楽教室を実施。労働者と子どもの送迎を行うバスを購入。

9 インド
取引開始 2012 年



農園労働者の子どものための PC ルームを建設。労働者が暮らす長屋用に小規模水力発電機を設置。

10 スリランカ
取引開始 2013 年



小規模紅茶生産者の健康を守る有機農業の推進や、コミュニティセンターの建設を実施。

16 ペルー
取引開始 2010 年



図書室の設置や、煙害を防ぐ改良かまどの設置、家庭菜園プロジェクトなどを実施。

17 エクアドル
取引開始 2011 年



生産者の暮らす山間農村部に不足する小学校校舎の建設や、コーヒーの木さび病対策を実施。

18 キューバ
取引開始 2012 年



民間企業がフェアトレードを通じて社会主義国家の開発を手助けする、先進的な事例となっている。

19 ボリビア
取引開始 2019 年



コロナ禍のロックダウンの際、入手が困難だった食料などの生活必需品を供給。

20 ホンジュラス
取引開始 2022 年



生産者の健康を守る持続可能な有機農業の実現に向け、有機堆肥場の建設を進めている。

お客さまの一杯で フェアトレードの輪は つながっていく

生産者と向き合い、一緒になって切磋琢磨する。
そして、安全でおいしい一杯のために
製法、抽出にもこだわりつくし、お客さまに届けているのが、
ゼンショーフェアトレードだ。
その一杯で、あなたもフェアトレードの輪の中に。



ココスのドリンクバー

フェアトレード商品の主な提供ブランド



すき家



はま寿司



ココス



ビッグボーイ

Victoria Station

ヴィクトリア
ステーション



ジョリーパスタ



オリーブの丘



華屋与兵衛



熟成焼肉いちばん



久兵衛屋



ゼッターリア



モリバコーヒー



カフェミラノ



ジョイフーズ

フェアトレード専門コーヒーブランド 「THINK EARTH COFFEE」

より多くのお客さまに気軽にお楽しみいただける
よう、コーヒー（粉・ドリップバッグ）を直接販売
するフェアトレード専門コーヒーブランドを展開。



公式サイト thinkearthcoffee.com



お手軽に飲める 缶タイプも販売中

フェアトレード原料を使用してつ
くられた缶タイプのコーヒー、ミ
ルクティーを、グループ店舗の自
動販売機やデリバリーで販売。



※2024年6月現在 ※一部提供していない店舗があります